

夜間定時制高校の給食

～食事の楽しさが学業の糧となる～



埼玉県福祉部社会福祉課 りゅうまえ 龍前 こういちろう 航一郎

夜間定時制高校では、生徒のために給食が実施されている。これは学校が自主的に実施しているのではなく、「夜間課程を置く高等学校における学校給食に関する法律（以下「法」という。）」という、まさに夜間定時制高校の給食のための法律に基づいて実施されている。

昭和20年代中頃に給食が始まった当初の実施目的は、勤労生徒の健康の保持増進のためであった。

今は時代が変わり、定時制高校は様々な課題を抱えた子を受け入れる、いわば「万能」教育機関となっている。そのため生徒は、学校以外に職場での勤労生活や家庭での日常生活において様々な困難に直面している生徒が多い。

定時制高校の教員はこのような生徒を受け入れるため、学校の勉強だけでなく、生徒からの様々な相談を聞くなどして、生徒の学校生活を支えている。その中で大きな力となっているのが学校給食である。給食は単なる栄養補給システムではなく、コミュニケーションの場になっており、そこでの生徒同士あるいは生徒と教師の間でのやり取りが、学校生活を楽しくさせ、また学校に行こうという意欲を生み出している。

本論では、夜間定時制高校の給食の上記のような機能に着目し、定時制高校の課題とそれに対して給食が果たしている役割、今後の取組の方向性について検討したい。

1 県立定時制高校の給食の現場から

実際、夜間定時制高校でどのような給食が実施されているのか、まずは現場を見てみたいと思う。

夜間課程のある県立定時制高校では、全ての学校

で給食が実施されている。それぞれの学校給食の現場でどのような取組が行われているのか調査するため、浦和第一女子高等学校定時制と上尾高等学校定時制の給食時間に訪問した。そこで、給食を食べている生徒や、献立作成し調理している栄養士や調理師の皆さんからお話を聞くことができたので、以下のとおり報告する。

(1) 浦和第一女子高校

午後5時前、まだ生徒のいない食堂。栄養士と調理師が手際よく準備を進める空気が伝わってくる。

厨房から香ばしいチャーハンの匂いが漂ってきた。生徒たちが食堂に向かう足音が聞こえてくる。扉が開いて何組かの生徒グループが入ってきた。

慣れた手つきで給食カードを喫食と書かれた箱へ入れ、トレイの上に次々と食事をのせていく。

思い思いの場所に座って食事が始まった。



浦和一女の給食

本日のメニューは「あんかけチャーハン、ひじきとパスタのサラダ、糸かまスープ、牛乳」そして手

作りの「かぼちゃタルト」だ。浦和一女は女子校ということもあり、栄養士の津田さん手作りの日替わりデザートが好評である。

やがて先生も食堂に来て、生徒と一緒に食べ始める。

給食の時間が始まるとすぐに来る生徒もいれば、時間ギリギリに来る生徒もいる。

グループで来る子が多いが、中には一人で来て一人で食べている子もいた。先生に聞くと、最初は食堂に来ることもできなかったという。今はようやく食堂に来ることができるようになり、ああやって一人で食べているが、それでも大変な進歩とのこと。

栄養士の津田さんに話を聞くと、「給食を作る上で最も心掛けていることは安全第一ということですよ。メニューはバリエーション豊かに、家庭では作れないようなものを作るよう工夫しています。」と真摯に答えてくださった。

一般的な学食でよくある、チャーハン、ラーメン、カレーライスなど一品だけの料理は避け、主食、主菜、副菜、デザートのバランスの良いメニューを提供しているとのこと。

生徒一人ひとりの食べる量は把握しているので、生徒が来て配膳するとき、その子に合わせて量を調節してご飯やおかずをよそっているという。また私が訪問した当日、生徒達も「今日は大盛りで。」「ちょっと少な目にして。」など自分の希望を言っていた。

また、生徒の食生活もだいたい分かっていて、朝食抜きの子が半数くらいいるという。

今後は、生徒への栄養指導や食育の普及啓発をもっと充実できたらいいと思っているとのこと。

食堂の壁には、生徒達が作った「食事」に関する普及啓発ポスターが貼ってあった（写真参照）。



手作りの“食育”ポスター

(2) 上尾高校

上尾高校定時制は共学で男子生徒が多い。よって生徒が給食を食べ切るまでの時間も浦和一女より短い。食べ終わればすぐに食堂を出ていってしまう。そこで食べている生徒達に、慌ててインタビューをした。



上尾高校の給食

本日のメニューは「エビのチリソース、中華春雨、サラダ、スープ、牛乳」にデザートとして「メロン」付き。男女とも3～4人程度のグループで食べている子が多い。

男子同士のグループでは、私の質問に元気よく答えてくれる子が多かった。好きな給食のメニューを聞くと、最も多い答えが「うどん」だった。

調理師の小須田さんに話を聞くと、「給食を家庭の夕食と同じものと位置づけて、メニューを考えた

り作ったりしています。このためメニューは家庭的なものとし、化学調味料を使わず、野菜など食材豊富なものを考えています。

また、家庭的雰囲気的大事にし、食べながら本音で友達や先生と話ることができるような場づくりを心掛けています。」と情熱をこめて語ってくださった。

そのため、わざわざ「おいしい」と言いに来てくれる生徒がいたりすると、小須田さんはとても嬉しいという。

生徒の中には、給食がその日に食べる最初の食事らしい食事だという子もいるとのこと。

また、給食を食べる生徒を増やす工夫として、給食メニューの人気投票を毎月行っている。

1か月が終わったら、その月のメニューを貼り出し、おいしかったメニューや、もう一度食べたいメニューにシールを貼って投票してもらおう。そしてランキング上位のメニューは翌月の献立に入れるなどして、生徒の希望に答えているという。

(3) 楽しい食事が学校生活を豊かにする

夜間定時制高校では、授業開始前の午後5時台、または1時限と2時限の間の午後6時台に給食を提供している。

今回の訪問調査で印象的だったのは、インタビューした生徒は両校とも一様に「給食は安くて美味しい。」と言っていたこと、そして皆楽しそうに給食を食べていたことだ。

さいたま市の市立小中学校で実施している「地元シェフによる学校給食事業」に参加しているとある一流シェフから、学校給食は日常「ケ」ではなく非日常「ハレ」の食事だという話を聞いたことがある。先生も含め、みんなが一緒に食べる「共食」が大事で、それが給食を楽しくさせ、単なる栄養補給ではないコミュニケーションの場として機能しているのだという。

ところが定時制高校の生徒には、後述2の(3)でみるように、日常であるはずの「ケ」の食事が欠

けている子が多い。つまり夜間定時制高校の給食は「ハレ」の場としての食事だけでなく、「ケ」日常の食事の機能を併せ持っているのだ。共食の場として友人や先生とともに食事をとるだけでなく、本来家庭で提供すべき日常の食生活の補完の役割も果たしているのである。

最後になってしまったが、今回の調査訪問を快く受け入れてくださった両校の関係者の皆様には、ここで改めてお礼を申し上げたい。

2 夜間定時制高校における給食の役割とその変化

それでは改めて、定時制高校が社会の中で求められてきた教育機能の変化と、それに伴って夜間給食が果たす役割の変遷をみていきたい。

(1) 定時制高校の変遷

戦後新教育制度のもと新たに開設された定時制高等学校は、勤労青年の教育を受ける機会を保障するとともに、低所得層の人々がより高位の所得階層へと上昇するための有力な手段であった。

新制定時制高校が始まった昭和23年から、高度経済成長が始まる前の昭和28年頃までは、高校進学率が40%であり、その内5分の1が定時制高校への進学であった。このころの定時制は、学力が高く向上心があるが家庭の事情で全日制に進めない子が、働きながら高校へ行くための手段であり、卒業後の進路も大学進学や大企業への就職が多い。¹

ところが、高度経済成長により家計の所得が向上し、高校進学率が上昇すると事情が変わる。

第一次オイルショック後の昭和50年代には高校進学率が90%以上となり、中学卒業で就職する子が減少、全日制の高校へ行くことが「普通」のことになる。すると定時制高校は、全日制高校へ行けなかった子の受け皿の役割を果たすようになっていく。

さらに1990年以後の産業構造の変化により非正規雇用の労働者が増加。当然のことながらその影響は若者にも及び、定時制高校の勤労生徒も正規雇用ではなく非正規雇用が当たり前となる。²

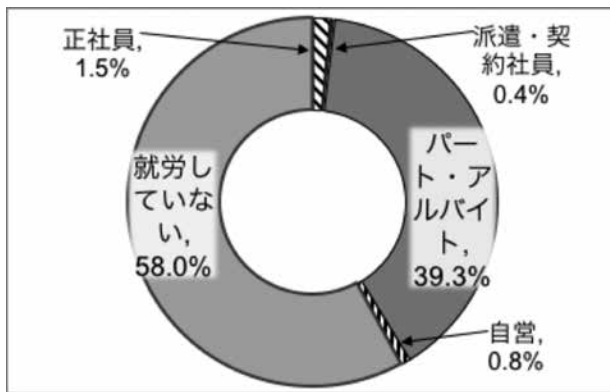


表1 定時制高校生の就業状況（平成23年）³

その後、産業構造の変化に伴う日本社会全体の貧困の増加、格差の拡大に加え、90年代から進められた学校改革による公立定時制の統廃合や単位制定時制高校導入等の教育環境の変化と多様化、少子化による生徒数の減少など様々な要因により、定時制高校には、単に「全日制に進学できなかった」だけの子ではなく、全日制中退者、小中学校時代に不登校を経験した子、外国籍あるいは親が外国籍の子、ひとり親家庭の子、生活困窮家庭の子など、本人や家族が多様な困難を抱えた生徒が多く入学するようになる。現在、定時制高校はそのような子供たちを受け入れる教育機関としての役割を果たしているのである。⁴

（2）夜間定時制高校における給食の役割とその変化

以上見てきたように、定時制高校が日本社会で求められる役割が変化するのに伴って、夜間定時制高校の給食が果たす役割もまた変わっていった。

そもそも法第1条では、夜間給食の目的を「働きながら高等学校の夜間課程において学ぶ青年の身体の健全な発達に資」することとあり、法制定当時の給食は、仕事を終えてから勉学に励む生徒の空腹と疲労を解消して授業に集中できるようにすることと、栄養補給により健康の保持・増進を図ることが目的であった。

この時代においては、1日3食の内、朝食は家庭で、昼食は職場で食べ、夕食は学校へ行かなければ

家で食べる場所であるが、それが無理なので学校で給食を食べるといふ食生活である。

ところが、そのような生徒は年々減少し、代わりに増加した様々な困難を抱えた生徒の場合、1日3食の内、栄養バランスのとれた食事らしい食事は夜の学校給食のみで、それ以外の食事はスナック菓子であったり、いつも同じ一品だけの料理であったり、場合によっては家での食事は無いという子もいる。

このような生徒にとって夜間給食とは、単なる栄養補給ではなく、本来家庭での食事とはどのようなものが学ぶ機会であり、家族だんらの代わりに友達や先生とコミュニケーションを深める場であり、そして健康を維持するためバランスのとれた栄養を摂る命綱となっているのである。

（3）定時制高校の生徒の食生活

現在の定時制高校生の食生活の実態はどうか、高校生へのアンケート調査による研究報告を中心に見ていきたい。

農林中央金庫が、首都20～50kmのドーナツ圏内に居住する高校生400人を対象に2012年3月に実施した食生活に関する調査では、朝食を「毎日」「家で」食べている生徒が72.5%と4分の3近くを占め、全く食べない生徒は6.5%である。⁵

それに対し、定時制高校の生徒に限ると、調査対象者が北海道の公立定時制高校の生徒380人になってしまうが、北海道文教大学の講師による2010年9月の調査では、朝食を「毎日」食べる生徒がわずか35.0%であり、全く食べない生徒が35.3%にもなる。⁶

埼玉県全体の定時制高校生を対象とした調査は、管見の限り見当たらないが、県内西部地区の定時制高校に通学する生徒561人を対象とした調査はある。西部学校保健会・定時制養護教諭部会が2014年6～7月に実施した調査では朝食の欠食率が35.0%と、北海道の定時制生徒とほぼ同じ結果となっている。⁷

先の、首都圏の高校生を対象とした農林中央金庫の調査では、昼食・夕食を食べない生徒は0.0%という結果である。ところが西部学校保健会等の調査では、昼食の欠食率15.0%、夕食の欠食率が1.6%であり、1日1回しか食事を摂らない生徒も5%いたという調査結果が出ている。⁸

1日の食事回数だけでなく、食事環境も見てみると、農林中央金庫の調査では朝食を食べる高校生の内、一人で食べている子が44.7%いるのに対し、前出の北海道文教大学講師の調査では、朝食を食べる定時制生徒の内、一人で食べている子が68%と3分の2以上となっている。⁹

いずれも朝食を食べているかが検討の中心になってしまい、たとえ昼食や夕食を食べている生徒であっても、炭水化物に偏った食事ではないか、栄養バランスはどうか、誰と一緒に食べているのか等、食事内容や家庭環境に詳しく踏み込んだ比較検討がさらに必要ではないかと考えられる。だが、たとえ朝食主体の比較検討であっても、全日制も含めた高校生全体と比較して、定時制高校の生徒が問題を抱えた食生活を送っていることが見えてくるだろう。

3 中退防止の効果

1の調査で生徒に行ったインタビューでも、給食が楽しみで学校に来ていると答える生徒も多かった。つまり定時制の生徒は、学校給食から栄養補給だけでなく機能・効果を享受し、それが学校生活を楽しくさせ、学業への励みとなっている。

その点が顕著に表れるのが中退率である。

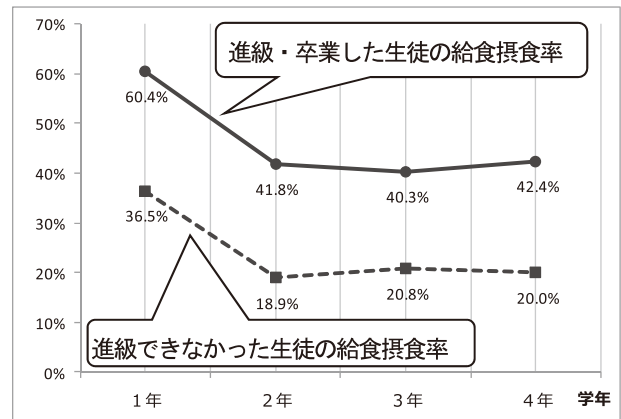


表2 埼玉県立定時制高校の生徒の給食摂食率¹⁰

表2のグラフを見ていただきたい。

これは、埼玉県高等学校教職員組合定時制課程通信教育部が2015年10月に埼玉県立定時制高校23校にアンケート調査を行い、回答があった11校の結果をグラフ化したものである。

実線が、進級・卒業した生徒の給食摂食率であり、破線が進級できなかった生徒や中退してしまった生徒の給食摂食率である。

定時制高校では様々な理由で給食を食べない、食べられない生徒がいる。

職場で賄いが出るという生徒もいれば、仕事がつも残業となり、遅刻するので食べられないという生徒もいる。また、その日一食分であればコンビニでおにぎりを買うくらいのお金を用意できるが、給食費を1か月分まとめて払うことはできないという生徒もいる。本当は食べたいが、親から給食費をもらえないので我慢しているという生徒もいるなど、理由は一人ひとり皆異なる。

この調査は、進級・卒業できた生徒がどれくらい給食を食べていたか調べることで、生徒が学校生活を続けるのに給食が果たしている役割の大きさを考察している。

グラフを見れば一目瞭然で、進級・卒業する生徒はきちんと給食を食べている生徒が多いのに対し、中退する生徒は給食を食べていない生徒が多いことが分かる。

やはり、給食は友達や先生とのコミュニケーションの場であり、学校を楽しくさせ、学校に行こうと思わせる機能がある。だからこそ給食を食べている生徒は中退につながりにくいのだ。

県内公立高校の中退率は年々下がっているとはいえ、全日制の平成26年度中退率が1.09%であるのに対し、定時制の平成26年度中退率は10.34%と約10倍の差がある。¹¹

夜間給食が中退防止に役立っていることが明白である以上、給食も職場での夕食も食べられない生徒が、給食をしっかりと食べられるようにする支援を進めるといった取組をより一層充実・強化していく必要があるだろう。

4 今後の展望

今後、夜間定時制高校の給食をどのように充実・

強化していくことができるだろうか。

給食が果たす食育の機能を拡充し、給食を通じて家庭の食事の向上を図ることも考えられる。それには生徒だけでなく、保護者も招いての給食試食会や、学校の栄養士によるセミナーなども効果的だと考えられる。

また、現在も多くの学校で導入しているが、地産地消メニューを拡大し、献立にストーリーを持たせることで生徒に食事に対する興味を抱かせ、給食をさらに食べてもらうことも重要だろう。地産地消メニューの拡大に当たっては、県農林振興センターの普及指導員との連携も効果的かもしれない。

以上のような取組を通じて夜間給食を充実・強化し、定時制高校生の学習意欲を向上させることで、様々な困難を抱えていても、未来につながる進路を決めることができる子が増えることになるだろう。

脚注

- 1 内藤博幸「低所得者層が階層移動する手段としての教育の機能－定時制高校を中心に－」『佐久大学信州短期大学部紀要』第25巻、2014年、4頁
- 2 高橋伸行「定時制高校入門－略史と現状－」『椙山女学園大学教育学部紀要』第6号、2013年、3～7頁
- 3 財団法人全国高等学校定時制通信制教育振興会『高等学校定時制課程・通信制課程の在り方に関する調査研究』、2012年、16～17頁。グラフは筆者が作成。
- 4 野中繁「広がる定時制・通信制高校の役割」『月刊 高校教育』第48巻第10号、学事出版、2015年、22～25頁
内藤 前掲論文、6～7頁。
- 5 農林中央金庫『東京近郊の高校生400人に聞く現代高校生の食生活 家族で育む『食』』農林中央金庫、2012年、7頁
- 6 木藤宏子 山際陸子「定時制高校生の生活習慣と不定愁訴の関連性について」『北海道文教大学研究紀要』第37号、2013年、160～161頁
- 7 西部学校保健会・定時制養護教諭部会「定時制高校生の基本的な生活調査（定時制高校生の生活実態調査その1）」『第17回 埼玉県健康福祉研究発表会 演題抄録集』、埼玉県保健医療部、2016年、102頁
- 8 農林中央金庫 前掲書、13頁、15頁
西部学校保健会・定時制養護教諭部会 前掲論文、102頁
- 9 農林中央金庫 前掲書、9頁
木藤 山際 前掲論文、160頁
- 10 長沢正貴「現場からの報告 夜間定時制高校における「給食」の意義：埼玉高教定通部の緊急アンケートから」『さいたまの教育と文化』第79号、さいたま教育文化研究所、2016年、10～11頁。この調査結果を基にグラフは筆者が作成。
- 11 埼玉県教育委員会『平成26年度埼玉県公立学校における児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査結果について』、2015年

参考文献

- ◎長沢正貴「現場からの報告 夜間定時制高校における「給食」の意義：埼高教定通部の緊急アンケートから」『さいたまの教育と文化』第79号、さいたま教育文化研究所、2016年
- ◎松岡元「夜間定時制高校、なぜ生徒たちは卒業できたか」『さいたまの教育と文化』第79号、さいたま教育文化研究所、2016年
- ◎西部学校保健会・定時制養護教諭部会「定時制高校生の基本的な生活調査（定時制高校生の生活実態調査その1）」「定時制高校生の就労について（定時制高校生の生活実態調査その2）」「定時制高校生の身体的特徴調査（定時制高校生の生活実態調査その3）」『第17回 埼玉県健康福祉研究発表会 演題抄録集』、埼玉県保健医療部、2016年
- ◎埼玉県教育委員会『埼玉の学校給食 平成27年度』、2016年
- ◎文部科学省『学校給食実施状況等調査-平成26年度結果の概要』、2016年
- ◎野中繁「広がる定時制・通信制高校の役割」『月刊 高校教育』第48巻第10号、学事出版、2015年
- ◎内藤博幸「低所得者層が階層移動する手段としての教育の機能－定時制高校を中心に－」『佐久大学信州短期大学部紀要』第25巻、2014年
- ◎板橋文夫「戦後初期勤労青少年教育の原像－埼玉県定時制高等学校を中心として－」『東邦大学教養紀要』第45号、2013年
- ◎木藤宏子 山際睦子「定時制高校生の生活習慣と不定愁訴の関連性について」『北海道文教大学研究紀要』第37号、2013年
- ◎高橋伸行「定時制高校入門－略史と現状－」『相山女学園大学教育学部紀要』第6号、2013年
- ◎農林中央金庫『東京近郊の高校生400人に聞く現代高校生の食生活 家族で育む『食』』農林中央金庫、2012年
- ◎財団法人全国高等学校定時制通信制教育振興会『高等学校定時制課程・通信制課程の在り方に関する調査研究』、2012年
- ◎中塚久美子『貧困のなかでおとなになる』、かもがわ出版、2012年
- ◎田丸啓「定時制高等学校の成立素描」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』第85号、2002年